慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クライストの悲劇性
Sub Title	Tragic elements in Kleist
Author	高橋, 文雄(Takahashi, Fumio)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1954
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.3, (1954. 1) ,p.97- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00030001-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クライストの悲劇性

高橋文雄

文學を素朴的なものと情感的なものに二大別したのはシラーであるが、文學を生み出す詩人もやはり素朴的詩人と情感的詩人とに分類し得ると思うし、その詩人の生活態度こそその文學を規定するものではないだろうか。その詩人が如何に生き、如何に苦しみ、如何に考へたかと云ふことが何よりも私の關心を惹くものである。文學を生み出す人間、そしてその人間の生き方を觀察することは、その文學を味うためにも必要なことのように思はれる。この二つ、卽ち文學を味うことと、文學を生み出す人間の生活態度を考へることとは決して矛盾するのではないと思はれる。

軍人の家柄に生れた（一七七七年十月十八日）クライストは十一歳の時に父を失ひ、十六歳の時に母を失ひ孤獨の人として育つた。父親に對しては餘り多くの印象を語つてはいないが、母親はやさしい心を持ち、大きな思慕をいだいていたようである。彼の生涯にわたつて母親の性格が強く良い影響を與へていた。亦彼の性格に母親と共に影響を與へていたのは、彼の異母姉ウルリーケであつた。彼女に就て詩人は『あなたは私を救うために一人の姉妹の力とはいはない。人間の力の及ぶ限りをつくしてくれた。』と感謝の氣持をあらはしている。彼が成育したオーダ河畔のフランクフルトは靜かな寂しい田舍町で家の向側には古い二層の家根と二つの塔を結ぶ橋のあるマリアの堂が建つていた。この靜かな景觀は幼い心に深く印象づけたにちがいない。十一歳の時父親を失うとベルリンの牧師カーテルの許に下宿し、ここで始めて文學の知識を與へられた。夢多き希望に充ちた幸福な時をすごしていたが、やがて四年後に銃をとる

ことを學ばねばならなかつた。ナポレオンの軍隊がラインを越へ東進せんと企てている時、このフランス軍に對陳して、ライン軍團に入れられたが、溫い愛情に缺けた、この軍律に制約された生活から一刻も早く脫しようと考へていた。眞の生活は人間愛の基礎の上に立たねばならなかつた。彼の心は純粹な人間性と愛と理性とにとらへられ、やがてポツダムに引き返した。彼は平和の日が一日も早く到來することを希求し、憎しみと恐怖の荒涼たる世界から愛と信の甘美な世界へと彼の心は向いていた。戰線への途中異母姉ウルリーケへ宛てた手紙が最も良く詩人の心をあらはしている。『神樣、私達に平和を與へて下さい。ここで不道德に殺している時をもつと博愛の仕事につかいたいものです。』

人間的品位のない奴隷的訓練に對する嫌惡から軍職を退き（一七九九年）眞理と教養を求めて努力しようと決心した。一切の眞理と教養は理性の啓蒙によつてのみ到達することが出來ると信じていた。これに依つて神に近づきうると確信し叡知の世界へとつき進んだのである。彼が哲學研究を始めたのは幸福への眞實の道を求めるためであり、レーベンスプランを哲學の中に求めようとしたのである。レーベンスプランのない生活は無意味に等しいからである。彼の幸福は內心の幸福であり、外的なものから獨立して自己の所有となり、自己に密着しているものであるということは『幸福の確實な道を發見し、人生の最大困難の下に於ても惑はず、それを享受することに就いて』と云ふ論文に於ても考へられるところである。人間の最高目的は內的狀態にあつては德行、全存在に對しては幸福であり、この德行と幸福とは一つのものにならなくてはならない。何故ならすべての幸福は德行の中にのみ存在するからである。非道德な人間は知識の泉によつて否定されるのである。德行が幸福の母であり、最も善良なる者が最も幸福な人であると考へている。世俗的な幸福ではなく、倫理的美を直觀した時に感ずる愉悅が彼の求めている幸福であつた。この幸福を生涯持ち續けようと努力しているのである。倫理的完成のために、そして教養を求めるために軍職を退き、フランクフルト大學で學問に獻身するのである。幸福を得るために教養を得、教養を得るために學問を學ばねばならなかつた。然し感性的な彼にとつて學問の研究は重壓であつたように思はれる。『永遠に續くような證明と推論の連續これでは心は殆んど感ずることを忘れてしまう。幸福は心の中にのみあるのではないか、感情の中にのみあるのではないか、決して悟性の中にあるのではない。幸福は數學の命題のように證明されるわけにはいかない。感ぜられねばな

らない。』とウルリーケ宛に書いているように心の中には感情の世界へ向つて激しく動搖をきたし、ついには『知識は最高のものではあり得ない。行爲こそ知識以上のものである。』と言つている。

不安と知識欲が彼の生涯を精神的にも肉體的にも苦惱と失望におとし入れ、瞬時も休息を與へなかつた。彼は安息を學問研究に求めて充分でなく、戀愛に求めて失望し、終に文學に求めて最後の歸着點を發見しようと努めたのである。彼は常に激しい力を持ちつづけていながら生涯を寂しく終らねばならなかつたのは、彼の性格によるものであるが、彼を病的な天才として片づけてしまうのは當を得ないようである。『悪魔が私に部分的才能を與へた。神は人間に全部を與へるか、然らざれば無である』とは彼の告白であるが彼は實に部分的天才であると言つてよいようである。天才とは自分の裡にある何ものかにかりたてられた衝動人であると言はれるが、この『何ものか』と云ふのはデーモンの力であると考へられるが、クライストの悲劇もこのデーモンとの闘爭の結果である。デーモンと闘つたと云ふよりもデーモンの實現のために闘つたと考へるべきであろう。自己のデーモンを征服し、防禦することが幸福に達する必要なる要素であると考へていた。デーモンとの闘爭を一層激しくしたのは教養の桎梏であつた。それ故彼の生涯は教養の悲劇と考へることも出來そうである。『全が然らざれば無』これがクライストの精神である。完全と最高のものを求めてやまないクライストの心は平凡なものでは滿足出來ないのである。彼こそ徹底主義の遵奉者であると言へる。最高のものに向つてはあらゆる事を犠牲にして努力する炎の力を持つていた。若しこの目的が滿足させられなければ斷念してしまう。こんな考へ方が彼の行爲を支配し、生涯を不幸にしたと言へよう。『クライストは獨乙精神の總體の潮流から理解されることは最も困難なことである。』とグンドルフは言つているが、クライストの性格は彼自身のものであり、獨乙的偏屈の最大の具象化である。實に歴史上上殆んど比較しうる天才もない程獨自な存在であつた。彼はウェルテルのように欝勃たる不滿、憂欝な氣質、辛辣な狷介性、情熱的空想、瞑搜的傾向、苦痛に對する一種の愛、感情の激發をもつていた。

デーモンにかりたてられた彼はウュルッブルクへ漂泊の旅に出た。苦惱に傷つけられた心を療すために未知の山、川に對する憧憬は彼の心を強くひいた。常に彼の心は南方のあたたかい自然を求めてやまなかつた。この強い憧憬が苦惱に充ちた心に生命の力を與へて

くれたのである。漂泊の旅から戻ると再び知識を求めてやまない意欲にとらへられ、彼の全生命は學問の基盤の上に建てられなければならないと考へたが、この基盤も彼の足下でゆれ始めた。これがカント哲學への接近により生じた心のエルトベーベンである。眞理と教養の渇望者クライストにとつてカント哲學は、我々の欲望は制限されねばならない、我々は何一つ知ることは出來ないと云うことを教へた。絶對的眞理は存在しない。すべての人間的認識の可能は單に感覺的經驗世界の上に制約されるものであることを知つた。學問に對する反抗意識は益々高まり、眞理と教養を求めてならず、人生の幸福を欺むいていることを知つた。眞理への疑惑、學問への不信、これは學問こそ『自分の欲するもの』であると考へていたクライストにとつては幸福の破壞であり、知識の尊重と云ふ呪文が破れたことをも意味するけれども、彼の悲劇的なものが、やはりここにもあるように思はれる。戀人ウィルヘルミーネ宛の手紙に『私の本質は今私の内心を捉へた思想に脅へている。それは私の上に深く震憾する作用をもたらした。若し我々が眼球の代りに綠色の硝子を持つていたとすると、眺める對稱はすべて綠色であると見なければならないだらう。さらに斯樣に見へるものは對稱そのものが綠色なることによるのか、或は眼そのものによつてそう見へるのか、何れであるかを判斷することは出來ないであらう。人の悟性と云うものもまたこの通りである。我々は我々が眞實と名づけるものも果して眞實であるか或は眞實のように思はれるものか、何れかはわからない。後者であるとすれば現在我々が集めている眞實と云うものは我々の死後には何物でもない。あらゆる努力、或物を把握して死後も把握を續けんとする努力はすべてむなしい。』

神の存在を信じ、この神が絶對的眞理を形象化するものと考へていたが、カント哲學により神を破壞してしまつた。そのため彼は益々絶望の深淵に落ちていつた。カント哲學により、彼は理性に頼つては事物の本質を把握し得ないと云ふ締念に達し、知識に失望し、知識の限界に到達し、懷疑の奈落に陷つたのである。彼は運命論者となり、神秘的な考をもつようになつた。『私の最高唯一の目標は失はれた。私はもはや何ももつていない。』と書いているが、然しこの絶望の中からも生活目的を見出すであらうという淡い希望をもちながら、耐へがたい狀態から逃避するために旅に出た。知ることは大きな價値ではないと考へた詩人はパリーへの途中ドレスデンの自然を『私の足下に擴がつている風景は絨氈の中におりこまれた樣に見へるあの綠の床や村、うねつている廣い流れ、ドレスデンの町

に接吻するとすぐまた急に流れ去つて行く。澄んだ紺碧のイタリヤの空がこの地方を掩つている。空氣も甘い味がするようだ。果樹は滴る芳香をまきちらし到る處芽と花です。全自然は十五歳の乙女を思はせるようです。』とウルリーケに書き送つている。憂愁に閉されていた詩人はここで自由に大氣を胸深く呼吸し、はるかなる連山を眺めていた。荒涼たる知識の廣野では求められない自然の力をここで始めて感じたのである。デーモンの苦痛は自然の前には清新な爽かな心となつた。彼はあらゆる苦惱と闘う力を得た。又この町の畫廊を訪れ造形美術の美しさを觀賞することによつて彼はどれだけ心の平靜を取り戻すことが出來たかはかりしれない程である。ドレスデンの樂しい日を思ひ出に殘しながらマインツへ向つて旅を續けた。途中彼は人生觀に啓示を與へるような經驗をした。ライン河をボンへ向けて航行する途中暴風雨に襲はれた。その時のことを彼は『死の前の恐怖より恐ろしいものはない。我々が注意していない時は、あまり生命にも價値がないが生命こそは唯一の財産である。我々が生命をたやすく投げ出し得ないなら輕蔑すべきである。たやすく生命を投げだし得るものこそ大いなる目的に利することが出來る。生命をいやしむ者は道德的に死んだものである。何故なら生命を棒げねばならない時に生命力を殺してしまうからである。』と書いている。生命の價値に對し嚴格な批判を行つた詩人は生命の意味を新たに解釋しようとした。

彼の如き偉大な苦惱する詩人は運命と闘い、デーモンの力にかりたてられ、奈落の底に落されていくのである。彼がパリーに到着した日は丁度平和祭の日であつた。雜沓するパリー、熟狂したフランス人、彼は一體どんな印象を受けただらうか『私はこの最高の無秩序を見て、どんな印象を受けたかをあなたに言うことは出來ません。一體運命はこの國民をどこへつれ去ることだらう。神のみ知ることです。たまたま私はルソーの書物のある圖書館へ行つて見た時、國民は何をここから利用しているかと考へました』と書いている。パリーの外面的生活、華美と狂亂の都會の中で孤獨な詩人の寂莫たる氣持は長い滯在を許さず、彼の心は暗い運命に壓迫されていくのであつた。ツーン湖のデロゼア島に移り、素朴な純眞な人々にかこまれて靜かな湖の孤島で『ローベルト・ギスカール』の筆をとり始めた。然し名譽心にかられ心があせる程益々想案は亂れる。この苦惱の中に何處からともなく死の恐怖があらはれ、やがて焦燥から憤怒へ、怒から狂氣へとかりたてられ、死の恐怖は現實の姿となつて彼を襲つたのである。殆んど出來上つていた「ローベルト・ギスカ

ール』の原稿をパリーで燒き捨ててしまつた。ここにも彼の生活の暗い一面が現はされているように思はれる。その後彼はあてもなく漂々と彷徨し始めた。この時代の苦惱をウルリーケに宛て『パリーで殆んど出來上つていた作品を讀返し破り捨てて燒いてしまいました。萬事は終つた。天は地上の名譽と最高のものを拒んだ。駄々子のように私はすべてのものを天に向つて投げつける。私はあなたの親切にむくいることは出來ない。この親切なしには生きていけない。私は死の中に突き進む。安らかであれ、私は北の海岸をさまよい歩く。』

一八〇五年ケーニヒスベルクで小官吏になつたが、彼は屬吏的職務に滿足していたわけではない。只物質的困窮を幾分なりも輕くするためであつた。この時代は彼の生涯の中で最も安靜な時期であつた。焦燥と不安の中から再生し、これを支配し、統禦する力が生じてきた。彼はもはや社會のくだらないと思はれるような事に對しても革命を起したり、憤るようなことはなくなつた。（たとへそれが內面的ではなく、外面的な現象であるにせよ。）この時代の彼の生活にはルソーによつて教へられた感情と悟性の鬪爭はすべてこの時代に克服されてしまつた。常に發展してやまない詩人の生活は一時的な靜止をもたらした。一體この一時的靜止は何を意味するものだらうか。やがて爆發するであらう活力を內に畜へているとも考へられるし、又この一時的靜止はやがて來るべき發展を意味するとも考へられる。この時代は作品も最も豐かな時代であつた。「アムピトリオン」「破れかめ」「ペンテジレーア」「O公爵夫人」「チリーの地震」等はみなこの時代の產物である。

雜誌「フエーブス」の創刊號に「ペンテジレア」の斷編を揭せてゲーテに贈つたがゲーテの古典的均齊はクライストの誇張を容れなかつた。ゲーテへの尊敬は憎惡に變り、ゲーテを攻擊し、ゲーテを諷刺する詩をフエーブスに揭せたため益々クライストは當時の文壇からはなれ孤立してしまつた。

この時代に彼の人生觀と世界觀に大きな衝擊を與へたのは普佛戰爭の勃發であつた。一八〇五年ドイツ帝國の大部分はナポレオンの支配下に屬さねばならなくなつた。一八〇六年フランス軍に對して反抗を示したが、何の効果もなく只フランス軍の蹂躪されるままであつた。これは當時コスモポリタン的傾向がドイツ人を支配していたからであらうけれどやがて『獨乙を救うものは只獨乙あるのみ』

と考へるに至つた。文學もコスモポリタン的なものから國民的、愛國的なものへと移行しシルレルの「オルレアンの乙女」「ウヰルヘルムテル」ゲーテの「ヘルマンとドロテーア」更に最も愛國的な作品としてクライストの「ヘルマン戰爭」「ホンブルクの公子」等があげられる。クライストの國家に對する明確な考へは『國家が我々に要求するのは國憲を守れと云うことにすぎない。然し人間性の愛と德、忍耐、謙讓等の美德は何人によつて命ぜられるか。我々自らの理性より他ではない』とウルリーケ宛に書いている所からも察せられる。詩人の內面には國家と個人、法と自由が互に鬪爭し、この葛藤から逃れようとする苦惱が益々病的なものと云はれる迄發展した。ここにも彼の悲劇的なるものを生み出す基盤があるように思はれる。彼は自然の世界へ逃れるために一八〇九年再び漂泊の旅に出た。

彼の心の動きを知るためには『人形芝居に就て』と云ふ論文を除外することは出來ないだらう。この論文の人形の動きが人間の動きよりも優美で典雅なのは何故かと云う問題に解答を與へている。人形の單純な動作の中では無限の生命が流れている。その動作は自由な內在と表現の調和であるけれど、人間は自己の肉體の意のままにすることが出來ず、內在のテンポに從つて運動することが出來ないのである。認識が無限に擴大された時、典雅が再來する。人間の肢體に於ても全く意識をもたない場合か或は無限に意識を持つ場合に最も純粹に典雅が現はれる。卽ち操り人形か、神に於てはじめて典雅は光輝を發する。我々は素朴純眞な狀態にもどるためには智慧の實を味はねばならないであろうか。然しこれこそ世界歷史の最後の一章である。これは知と情の矛盾を示し、知を得たものが再び素朴な無意識へ憧憬れる惱をあらはしている。感情と原則、自然と學問、行爲の人と理性の人を合一しようとした。この二つの對立する要素が正しい倫理的人間を生むものと信じていた。この二つの對立が彼の人生を多忙なものにしていたと考へられる。この論文をのせたベルリーナア・アーベントブレッテルもうまく行かず、さらにフランス官憲から壓迫され、彼の心身を極度に疲勞させ、終いに死のみが現世の苦惱から脫する唯一の道であると信ずるようになつた。『姉に一目合ひたい、一言話したい』と云う希望をもつてフランクフルトのウルリーケを訪れた。(一八一一年)然し旬日後にはフォーゲル夫人を伴つてヴン湖畔のシュティンミングに來ていた。フォーゲル夫人と知り合つたのは一八一一年ベルリン滯在當時であつた。彼女は病身でその上青春時代の心の傷は彼女を變質者にしてしまい、

永遠の休息を求めていた。この二人は互ひに相索くものを持つていたようである。絶望と苦惱に傷められた二つの心は同じように死を求めていたのである。互ひに現世を呪咀する叫びは怪しき情火の炎と化し、二つの心臓は燃へ上る。二つの惱める心は悲慘な境遇を省みて何を思ひ、何を感じたであらうか。

クライストの生活そのものが悲劇であつたと言へるだらう。彼をとりまく境遇の怖ろしい闘爭の中で彼の内面的苦しい反抗のもとで不滅の作品を殘したクライストは孤獨の詩人と呼ばれているが、彼は自ら求めた世捨て人ではなく、强ひられた孤獨であつた。彼はたへずこの孤獨から脱しようとするが失敗を重ねる。ここに彼の悲劇性があるように思はれる。苦惱が降りかかつてきても何の抵抗發撥をなし得ないような弱い性格を持つた人の悲劇は眞の悲劇ではない。その降りかかつてきた苦惱に對し强い發撥を内包する人にのみ眞の悲劇が生ずるのである。クライストは苦惱に對し生涯の間反抗し續けてきた。その力も獨自のものであればこそ彼の悲劇的なものは彼獨自のものと思はれる。悲劇性とは悲劇的なものを生み出す根源である。

附　記

私はクライストの心の動きを主として彼の書簡を通じし觀てきたのである。人生が彼に與へたものはゲーテの生涯と較べれは實に見すぼらしいものであつた。然し彼の詩作は人とは對蹠的に豐艶である。ゲーテは生活を詩に置きかえたが（特に青年期）クライストは自己の生活體驗に基いてそれ以上の希望と夢とを詩作したように思はれるので彼の作品については別に述べる必要がある。